



6 山寺 — 古刹・芭蕉ゆかりの地

不滅の法灯と秘仏

山寺は「宝珠山立石寺」を中心とした門前町一帯を呼び、1950（昭和25）年には国の名勝史跡に指定されました。登山口から奥の院まで約1000段の石段が続き、周りは奇岩怪岩と樹木が四季折々の美しさを醸し出しており、仁王門や五大堂などの景勝地があります。

立石寺は、860（貞観2）年に、比叡山延暦寺の別院として慈覚大師・円仁が開いたもので、人々の信仰が集まる霊場です。根本中堂は、国指定の重要文化財で、初代山形城主斯波兼頼が1356（延文元）年に再建し、ブナ材で造られた日本最古と言われる建物です。

堂内には、天台宗の宗祖である伝教大師・最澄が中国から持ち帰ったと言われる不滅の法燈が、千年を超える光を灯し続いています。また、秘仏の御本尊薬師如来が、2013（平成25）年の春に50年ぶりに御開帳され、県内外の多くの参詣客で賑わいました。



山寺三大祭



山王祭

山寺中学校生の英語の観光案内



夜行念仏



山寺切手 見本



磐司祭

俳句を楽しむ門前町

俳聖松尾芭蕉（1644～1694）は、1689（元禄2）年に、山寺を訪れ、名句「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声」を詠みました。

「山寺芭蕉記念館」は、芭蕉が訪れてから300年目、山形市制100年を記念して1989（平成元）年に造られ、山寺は芭蕉ゆかりの地になっています。

俳句の全国大会や英語俳句大会を開き、山寺小中学校では俳句づくりが盛んで、外国観光客には英語の観光案内などに励んでいます。

三大祭

「山王祭」は5月に五穀豊穰と安産を祈願する日枝神社の祭で、3基の御輿が門前町を勢いよく駆け抜けます。8月には奥の院まで供養文を唱える「夜行念仏」とシシ踊りを奉納する「磐司祭」があります。

ミニ知識 35

「閑かさや」の成句と蟬

初案 山寺や 岩にしみつく 蟬の声
成句 閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声

夕暮れの山内の静けさが心に迫ってくるように、推敲によって対象が絞り込まれてきています。

また、この蟬は、何と鳴いたかという論争が続きました。昭和初期に斎藤茂吉がアブラゼミと主張し、ドイツ文学者の小宮豊隆らはニイニゼミと反論したのです。1933（昭和8）年8月初めに、山寺の蟬を捕まえて調べたところ、ニイニゼミが多いことが確認され、一応決着がついたようです。

しかし、芭蕉は7月13日に訪れており、地元の人はその頃にはヒグラシも鳴くと話します。長年の気候の変動で温度も変化しており、昆虫の生態も変わりますので、芭蕉が聴いた蟬の声は実際何だったのか、謎のままです。

慈覚大師が開山し芭蕉が訪れた古刹が、東北地方には山寺の他に3ヶ寺あります。それは、松島の瑞巖寺と平泉の中尊寺・毛越寺です。山寺とこれらの地を結び巡礼する「四寺廻廊」の企画で、新たな広域観光コースのひとつとして注目されています。

山寺の奥には、仙台と短距離で繋がる二口街道があります。急峻な峠道は近年改修されましたが、道幅はまだ狭いため、安全な道路の開発が望まれます。